

---

# 違う扉

萌視

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
違う扉

【Nコード】  
N8531D

【作者名】  
萌視

【あらすじ】  
歩道橋にある真っ黒い穴わたしはこの穴に落ちた

## 真っ黒い穴（前書き）

初めて書いたので、下手くそかもしれませんが、よろしく願います

## 真っ黒い穴

2012年 12月07日

・ 東京

「あーああ… やつと冬休みで、happy? って感じだったのに…  
なあって、期末テストで赤点とっちゃうかなあ… もう… ヤダァ!!」

「しょうがないよ、萌。単位足りないし赤点とっちゃうし」

「だって… いいよねえ… 綾女は頭が良くて」

私の名前は、

羽山 萌

高校2年生

勉強が大っ嫌いで

勉強してなくて

その結果がこれ

数学12点 世界史10点 理科9点

最悪

ここから

私の物語りは

始まった――

いつもと変わらない道  
いつもと変わらない人達  
いつもと変わらない朝

だけど

何かが違う

違和感がある

私は歩道橋の階段を登りふと  
歩道橋の真ん中をみた

「え……？」

―何……これ……？あ……穴……？

歩道橋の真ん中には  
真っ黒い穴が空いていた

―おかしいよ  
なんで誰も気が付かないの……？

すると

後ろから歩道橋を

駆け上がって

サラリーマンが来た

「あっあの」

「何か？急いでんだけど」

「あ…えと…その、なんでもありません!!」

「？」

サラリーマンは  
走り出した

サラリーマンは  
穴の上を走った

—え???

「穴に…落ちな…い??」

私はサラリーマンが  
去った後に  
穴を見つめた

ヒュウ…

微かに風が吹いてる

「風？？」

「石を投げて…みる？？」

ポイツ

カッーン

穴の上を石が  
跳ねた

「??？」

―いたずら書きなのかな？

手を添えてみた

ヒヤッ

―冷たい

「あつ！ヤバい！遅刻しちゃうよ」

―さっきの人が

大丈夫だったんだもん

大丈夫…だよ

私は穴の上を片足で  
ふみだしてみた

トン

大丈夫じゃん

両足をのせ

走り出そうとした瞬間

ガクン

――まっていたのだ

「え？」

――ずっとまっていたのだ

「きゃああああ」

わたしは穴に

おちた……

―参られよ  
汝が望むもの……

…誰？

―我は  
…み…なり

聞こえないっ

―我は…  
彪み人なり―

あやみ…びと？…？

―お前は  
えら…の…だ

え????

…ばれ…し…者…  
我…に…力…  
…かし…

なに???聞こえないよ

…やく

…く…のだ  
早く…くる…のだ

何処に…??

まだ…そ…時では…な

—この言葉を  
汝に…託す

彪み人なりしもの  
全てを消し去る  
覚悟があるのならば  
我に誓え

ティラヒアイジャ…ガ…

ドスン！

「きゃあー!!」

「いったあい」

私は地面の上に落ちた

「じじじ...どじ」

一面  
砂漠

なんにもない  
ただの  
焼け野原

「...まあ人は居るよね」

わたしは  
歩き出した

—結構歩いたな  
日も暮れてきたし

しばらく歩くと  
灯が見えてきた

「街?!」

私は走り  
街へと急いだ

―まずは  
ここは何処か  
聞かなきゃね

「へ?？」

私は目を疑った

「何…これ」

そこはまるで

昔の

教科書に載っている様な町並みだった

そう

江戸の様な町並み

「なんや!! あいつ」

一人の男が

こつちを向き叫んだ

「ほんまや、なんや? あの服…何処のもんや」

―わ…私？？

―たしかに  
皆着物だし  
私は制服…

すると  
役人の様な人が来た

「お前何処の奴だ」

―こ…この雰囲気

ヤバくない??

「あ…あの、此処って  
何処ですか??」

「なんだ貴様、此処は、  
勇間来町だ」

— ゆづまらいちょう??

「えと…」

— どうしよ…

「何処からきた??」

— うあ…どろろ  
うろろ…

あっ！！！！！

「あの…私、何も覚えてないんです…名前しか、思い出せなくて…」

「記憶喪失…か」

「よく…分かんないんですけど」

「気の毒だな」

—おっ  
上手くいった

「なんて…いうかと思ったか…！」

「へ？」

「逮捕する」

「っっっ」

「逃げろ！！！！」

私は全速力ではしった

「なんでこんな目にあうの〜!?!」

たたたたた

ハアッハッ…ハアッハア

―ヤッベ  
疲れた…  
限界かも

しばらく走って  
限界が近付いていた

「御用だ！御用だあ！待てえ！！」

―てかしつこいし！！！！

「もっ……む……りい！！」

すると目の前に小さな  
店を見つけた

―入っちゃえ

「何処にいったあ?! 探せ!!」

「ぎゅぎゅ」

「おい」

「ビクッ」

「てめえ、人の店で何してんだよ?!」

^  
:  
?  
?

## 真っ黒い穴（後書き）

私の妄想を小説にしてみました（藁

## 龍（前書き）

キャラクター紹介

羽山 萌

17歳

高校二年生

特技：剣道（五段）空手（三段）

身形：髪はショートの茶色、服装は制服。中のシャツはしろで黒いネクタイ、青のベスト、スカートは赤のチェック、結構短い。  
性格：優しく強い女の子

藤木村 龍 28歳

特技：二刀流

身形：茶色の袴に腰に刀を指している、髪はツンツンの黒

性格：曲

がった事が大嫌いな男、店は街一番の情報屋

龍

へ…？

「黙ってないでなんとか言えよ」

「あ…あの、えと…私、役人さん…？に追いかけていて、走って逃げていたらですね…その、この店があつて…」

「無断で入ったのか」

「す…すみません」

「いたか?!」

「いえ、見当たりません。」

「まだそんなに遠くに行っていないはずだ。探せ!!探せ!!」

店の周りには

役人が5、9人程いて  
私を探していた

「で」

「で...??」

「はぁ…だから…！なんで追いかけられる羽目になったんだ？…って言ってるんだよ…！」

「あ…それは…ですね、………」

「…」

「理由いえねえのか」

「…」

「おい

」  
「どうせ…」

」  
「あ？？」  
「？」

「どうせ言ったって、信じてもらえないと思うから…」

「俺はなんでこんな羽目になったんだって聞いたんだ!! 信じるも糞もあるか!!」

「  
…」

私は  
いままであった事  
全てをはなした

「へー。世の中には、いろんな事があんだな」

「!?!? 信じるの? 信じてくれんの?」

「さあな」

わたしは顔を  
膨らまし少しいじけた

「だけど、その声の主は、何かおめえに頼みたい事でもあったんじやねえのか?」

「うん……」

—確かに…だって  
ずっとまっていたのだ  
なんて

「調べてこえはいいだろ?？」

「え?」

「お前耳わりいな!!だから、調べてみればいいじゃねえか!!」

「調べる事…できるの?？」

「ああ。できるぜ」

「本当に?!!どうやって?!!」

「おっと、ここからは有料だ。一応俺様は情報屋だからな」

「…けち」

「仕事なんだからしょうがねえだろ??」

「いくら??」

「お、払うのか??なら話は早い、しめて50文だな。」

「安いな…」

「ちょうどいただくよ」

「さあ話して」

「この村の奥に石垣町っつーのがあるんだ。ばばあに話し掛けて、アヤナシカグルっていつてみる。そしたらばあが『何の用や』って言って来るから、そこでお前さんの悩みをいつてみる」

「へー、分かった行ってみる」

「—そんなんでわかんのかな？」

「役人に見つからん様に裏口から出るよ」

「あ…名前」

「俺の名は龍」

「龍??」

「藤木村 龍」

「私は…羽山萌」

「萌…またな」

「…うん。バイバイ」

――龍……信用できるのかな  
てか  
あれ何歳なんだ？

龍（後書き）

話みぢかくて

本当すいません。

楽しんで読んで下さい

## ヤバイよ（前書き）

ちょっとエロ入ってます。観覧ご注意ください

ヤバイよ

私は

龍に言われたとおりに  
裏口から出て行った

「誰もいませんか??よし」

「てか…何処にいんのよ??それを教えてくれなきゃ分からないじやない!龍の馬鹿あ」  
私は文句をいいながら  
走っていた

「走りながら喋ると、舌、嚙んじゃうよ??」

「あんた誰？」

「役人さあん！」

「や…役人!？」

「うっそお!!」

―はあ???

何よそれ??

まだウザいし

私は無視した

「ねえねえ…彼女お」

―あゝうるさいなあ

「無視い??ねえってば」

「教えてあげようか??あのひとの居場所」

「あのひと…??」

「あはっ!食いついた」

「あ”」

「あんななの？」

私はすこし

冷たく言っ

「僕？？僕は島崎孝太郎。コウって呼べよ」

「で？？」

「僕に付いておいでよ」

私は孝太郎を信じてはいないが  
道が分からないので  
とりあえず  
付いて行っ

—もう30分は  
歩いてる

何処までいくのよ??

「まだ??」

「  
…」

「  
っもう」

「ほら着いたついた」

そこはまるで  
おばけがでそうな  
屋敷だった

「此処の二階だよ。達者でね」

「え…?? 孝太郎は行かないの??」

「コ・ウ」

「コ…コウは行かないの??」

「僕?? 僕は行かないよ。来るなって言われてるしね」

「…誰に??」

「それは言えないよ。命令に背いちゃいけないんだ」

「命令…??」

「そう。僕は下僕だからね。」

「下僕??」

「  
」

そう言った後に

コウは屋敷を見上げながら言った

「早く行きなよ。あのひとが待ってる」

「…」

「僕はいくよ。じゃあね。萌ちゃん」

—なんで私の名前?!

「ねえ…なんで私の」

問いた時には  
彼はいなかった

「あれ??」

―早く…おいで

「!？」

―あの時と同じ声

「貴方は…誰」

ぐいっ

私は不思議な力に  
引き寄せられた

―な、何?!  
何処へ行くの??

抗っても

抵抗しても

ビクともしない

―何??この力…

魔法?!

ドスン

「きゃあ」

私はある部屋の絨毯の  
上に突き飛ばされた

「いたた…」

「早く来いって言うてんのに来ないからあたしがわざわざ引き寄せ  
てやったんだ。感謝しな」

「あんた誰」

私は冷たく言い放った

「…あたしかい?？」

「あんた以外に誰がいるのよ?？」

そう言つと

彼女が近寄ってきた

「お前…口の聞き方には、気をつけな」

ゾクつとした

彼女の目は

とても冷たい目をしていた。

「あんたなんか…私の力で簡単に殺せるんだからね」

そう言つて

私の胸元に爪を立てた

ギリッ

「っ…」

ツィ

血がでてきた

「だが、許してやるよ。あんたの血はとっても良い匂いだからね」

「わ…たしの血??」

ペロ…

「んうつ」

「あんたの血は甘いね」

「やめ…」

声が出ない

彼女の魔法の力のせいだ

「話す前に少し楽しい事をしようか??」

「え…??」

「少しだけだよ…。あたし実は女の子がだいすき、なんだ」

ビクッ

「でも、あんたは論外。口の聞き方がなっていない、いいかい??年上に対する口の聞き方ってもんを教えてやるよ。」

ビリッ

「……っっ」

「声が出せないだろう。あたしがかけたんだ」

—こわい…

「大丈夫…少しほんの少し遊ぶだけ…」

—なんなのよ

このひと…

私何の為に此处に来たのよ!!

龍のせいだわ

あいつ…

今度会ったらただじゃ

おかないんだから…!!

って

今はそんな事考えてる

場合じゃない!!

どーすんのよ!!

私い!!

「かわいいおっぱいね…ほっら…こつすると、気持ちいいでしょ？」

「？」

胸の突起物を  
こねくり回して来る

「…っ」

「ああ、声が出なきゃ、楽しくないなあ」

「…あ」

—声は出る…けど

「喘ぎ声しか出さない様にしたのよ」

—まだでムカついてきたけどお…なんにも  
できませえん（泣）

「ほうらもう一回」

さっきよりも  
激しくこねくり回してきた。  
「うっ…んう」

「あらあら胸の感度悪いのねえ……」

―がまんしてるんですう感度悪い様にみせかけて諦めさせる作戦！！

と

萌は考えていたが  
甘かった

「なら、舐めちゃえい」

ちゅぱっぺロちゅっちゅ

「んん……」

―舌の感触がああ

「我慢してるのね？？」

―ば……バレたー！！！！  
いや、まだ希望はある

と

思っていたのも  
束の間

彼女には  
バレていた

「んふふ……」

コリコリッ  
ペロちゅっちゅ  
「あはあっ」

——しまったあ  
気持ち良くて……つい

「やっぱり……」

「下の方は……」

くちゅ

「ぬれぬれだわ」

「やめ…なさい…よ」

「あらあ駄目よお、あんたが口の聞き方を治さなきゃね」

― 治せばいいんでしょ  
と言いたいところだけど口が思う様に動かない！！

彼女は萌のパンツの中に手を入れて来た

ぐちつくちゅぬぶんっ

「あああんっ」

「感じまくりねえ…嬉しいわあ、私にかんじてくれて」

― ヤバイ…マヂヤバくない???この状況…

―昔…おばあちゃんに

「ティラハイジャガ!」

カッ

ドカ――ン………!!

「つたく…やっといったわね…」

「え?？」

「あんたがそれいわないと、始まらないから、言わせる用に仕向けたんでしょ!!」

「え、ええ…??」



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8531d/>

---

違う扉

2011年1月4日02時14分発行